百ルーブリで買えるもの　　ロシア

昔むかし、ある商人(しょうにん)に、イワンという息子がいました。商人がなくなると、イワンは、財産(ざいさん)を使いはたして、金持ちのおじさんのところで働きはじめました。

あるとき、おじさんは、イワンを連れて、たくさんの船に商品をいっぱい積んで、海の向こうへ出かけていきました。そして、あちらこちらの国で商売をして、お金をもうけました。

やがて、船は、あるにぎやかな港に着きました。おじさんは、イワンに百ルーブリのお金を渡していいました。

「なんでも、おまえの好きなものを買っておいで。それがすんだら、国に帰るとしよう」

イワンは、百ルーブリを手にして市場に出かけました。一軒(いっけん)一軒店をのぞいていると、どこからともなくひとりのおじいさんが近づいてきました。

「お若(わか)いかた、何をお探しかな」

「百ルーブリで買えるものを探しているんです」

「じゃあ、おまえさんが今まで見たこともないような品物を、百ルーブリでゆずってあげよう」

イワンがおじいさんに百ルーブリわたすと、おじいさんは、

「ついておいで」といって歩きだしました。

しばらく行くと、町はずれに、りっぱな庭がありました。庭は、金(きん)のさくで囲まれていました。その中に、絵にも描けない、口でもいえないような美しい娘が座っていました。

「この娘が、たぶんおまえさんが見たこともないような品物だ。連れてお帰り」と、おじいさんはいいました。イワンは、

「何をいうんだ。この人は品物なんかじゃない。こんなものはいらない」といいました。すると、おじいさんは、いいました。

「わしの品物が気に入らないなら、手ぶらでお帰り。お金も返してやらないよ」

イワンは、

(なんてことだ。百ルーブリはどこかに落としたようなものだ)と、くやしがりました。

船にもどると、おじさんが、

「品物は買ったかね」とききました。

「いいえ。いい物はありませんでした」

「それじゃあ、もう百ルーブリやろう」

あくる日、イワンは、また市場に出かけました。すると、あのおじいさんが近づいてきて、イワ

ンを町はずれのりっぱな庭につれていきました。イワンは、また百ルーブリ失いました。

その次の日、イワンは、もう百ルーブリおじさんからもらって、市場に行きました。あのおじいさんが近づいてきて、イワンを町はずれの庭につれていきました。

「さあ、わしの品物は、あの美しい娘さ。連れてお帰り」

イワンは、よくよく考えたすえ、これが自分の運命なのかもしれないと思って、娘を連れて帰ることにしました。

道みち、イワンは娘にたずねました。

「あなたは、いったい何者なんです」

「わたしは、ある国の王の娘です。うるわしのナスターシャとよばれています。十年前、川岸を散歩していると、美しいボートが浮かんでいたのです。そのボートをちょっとこぎたくなって、乗ったとたん、ボートは矢のように走り出し、五分もすると、岸が見えなくなりました。そして、美しい庭に着くと、あのおじいさんが、わたしを金のさくの中にとじこめてしまいました。あなたが買ってくださるまで、ずっとあそこにいたのです」

イワンはいいました。

「でも、おじさんには何ていえばいいだろう。三百ルーブリも使ってしまったのに、品物は何ひとつ手に入れなかった」

「だいじょうぶ。すぐにうめあわせができます。まず今夜の宿を借りましょう」

ふたりは、一軒の宿屋に部屋を借りました。イワンがベッドに入ると、ナスターシャはすぐに仕事にとりかかり、みごとなじゅうたんを織りあげました。

あくる朝、ナスターシャは、イワンにじゅうたんを渡していいました。

「これを市場に持っていらっしゃい。買おうという人が現れたら、お金は受け取らないで、よっぱらうまでお酒を飲ませてもらいなさい」

イワンは、いわれたとおり、じゅうたんを市場に持っていきました。じゅうたんは、すぐに売れました。そして、お金の代わりに、よっぱらうまでお酒を飲ませてもらいました。イワンは帰り道、よいつぶれて、きたない水たまりに倒れてしまいました。すると、町の人が集まってきて、笑っていいました。

「まあ、いい若い者が。もう結婚してもよさそうな年ごろなのに」

イワンは、腹を立てて、

「大きなお世話だ。おれがそういえば、うるわしのナスターシャが、おれの頭のてっぺんに、キスしてくれるんだぞ」といい返しました。すると、ひとりの金持ちの商人がいいました。

「おまえのいうことがほんとうかどうか、かけようじゃないか。おまえが勝ったらおれの財産をぜんぶやるぞ」

そこへ、ナスターシャがやって来ました。ナスターシャは、イワンの手を取って立たせると、頭のてっぺんにキスをしました。

こうして、イワンは、商人の全財産を手に入れました。さまざまな品物を並べたいくつもの店や、宝石がぎっしりつまった倉を手に入れて、イワンは町一番の金持ちになりました。すると、ナスターシャが、イワンにいいました。

「レンガづくりの職人(しょくにん)を呼んできてください。この宝石をつめたレンガを作らせましょう」

レンガができあがると、それを何台もの荷馬車につんで、おじさんの船にもどりました。おじさんが、

「やあ、どこをうろついていたんだ。どんな品物を買ってきたんだ」とききました。

「レンガですよ」と、イワンが答えると、おじさんは、

「まぬけだなあ。レンガなら自分の国にも、うんとあるじゃないか」といって、笑いました。

イワンは、ナスターシャを船に乗せ、レンガを積んで、ふるさとに帰りました。

ふるさとの港に着くと、おじさんは、買ってきた錦(にしき)とびろうどの布を持って、王さまのお城にあいさつに行きました。イワンは、レンガをふたつ持って、ついていきました。おじさんは、

「そんな値打ちのない物を王さまにさしあげるなんて、どうかしているぞ。どんなおしかりを受けるかわからんぞ」といいました。

王さまの前に出ると、イワンは、レンガを差しだしていいました。

「王さま、このレンガを割ってみてください」

王さまがレンガを割ると、中から宝石がこぼれ出て、部屋がぱっと明るくなりました。

「これは、みごとだ」

王さまは、ほうびとして、イワンに、町の一番いい場所で商売をすることを許しました。

やがて、イワンは、商売がうまくいきはじめると、結婚式をあげようと考えました。そこで、ナスターシャの父親の王さまに、招待(しょうたい)の使いを送りました。ところが、ナスターシャの父親は、

「王の娘を、どうして商人の息子などと結婚させられよう」と考えて、ひそかに家来を向かわせて、ナスターシャを盗(ぬす)み出しました。

あるとき、イワンが家に帰ってみると、ナスターシャがいなくなっていました。イワンは、泣(な)きながら、あちこちをさまよい歩きました。飢(う)えと寒さに苦しみながら歩き続けて、神さまに祈りました。

「神さま、わたしに道連(みちづ)れをお恵みください。少しでも気がまぎれるように」
すると、向こうから、ひとりのおじいさんが歩いてきました。
「こんにちは、お若いかた。どこへ行くのかな」
「ああ、おじいさん。わたしは幸せをつかんだのですが、その幸せを、ぽろりとこぼしてしまいました。うるわしのナスターシャを探しているのです」
「それは遅(おそ)すぎたな。ナスターシャは、ある国の王子と結婚することになっている」
「でも、一目でいいから会いたいのです」
「では、いっしょに行こう。わしが道を知っている」
ふたりはさっそく歩き出しました。
ずんずん歩いているうちに、ふたりはお腹がすいてきました。すると、おじいさんが、ふところから聖餅(せいべい)を一枚取り出して半分に割り、一方を自分が取って、残りをイワンにくれました。イワンは、
「これじゃ、おじいさんだけでも足りないよ」と、ことわりました。
「まあお食べ。神さまのおかげて、お腹がいっぱいになるよ」
おじいさんのことばどおり、聖餅を食べきらないうちに、お腹がいっぱいになりました。
どれほど歩いたことでしょう。やがて、ふたりは王さまの宮殿の庭にやって来ました。おじいさんはいいました。
「このりんごの木の下に立って、見張っていなさい。うるわしのナスターシャひめが出てきて、おまえのすぐそばを通るだろう。ただ、りんごの実が落ちてきても、けっして食べてはいけないよ。食べると、眠(ねむ)ったきり、目が覚めなくなるから」
イワンは、りんごの木の下に立ちました。じきに、りんごが落ち始めました。真っ赤にうれたみごとなりんごで、おいしそうな香りをただよわせていました。イワンは、こらえきれなくて、ひとつひろって食べました。たちまち、イワンは、深い眠りに落ちました。そのとき、ナスターシャが庭に出てきました。ナスターシャは、イワンを見つけてゆり起こそうとしましたが、イワンは目を覚ましませんでした。
ナスターシャは、紙切れに、
「さようなら。明日、わたしは結婚させられます」と書いて、イワンの右手に持たせました。
あくる朝、イワンは目を覚ましました。右手に、ナスターシャの手紙がありました。それを読んでイワンは泣きました。そこへ、おじいさんがやって来ました。
「あれほど教えておいたじゃないか。りんごを食べてはいけないって。さあ、早く、どこかに板切れ

がないか探してきなさい」

イワンは、板切れを一枚見つけて、おじいさんのところに持ってきました。おじいさんは、板切れに、糸を何本か張って、楽器にしました。そして、居酒屋(いざかや)の前に立って、いろいろな歌をひき始めました。たちまち、たくさんの人が集まってきて音楽を聴(き)き始めました。

居酒屋の前に、すばらしい音楽家が現れたというわさが、王さまの耳に届きました。王さまは、

「その音楽家を連れてくるように。ナスターシャの結婚式でひいてもらおう」といいました。

使いの者がやってくると、おじいさんは、イワンに板切れを渡していいました。

「わしの代わりに、おまえが行きなさい」

「だめですよ。わたしはひけませんから」

「心配はいらない。おまえは、指を動かしていればいいのだ。板切れがひとりでに歌ってくれるから」

イワンは、宮殿に連れていかれ、宮廷の楽師(がくし)たちに交じって、ひき始めました。すると、イワンの板切れは、ほかの楽器の響きをかき消し、人間のことばで歌いだしました。

眠れ、眠れ。だが寝すごすな
もう一度ひくと、こう歌いました。
遊べ、遊べ。だが遊びすぎるな
三度目にひくと、こう歌いました。
みんなぐっすり眠ってしまえ

たちまち、立っている者は立ったまま眠り、座っている者は座ったまま眠り、ひとりのこらず眠ってしまいました。イワンは、奥(おく)の部屋にかけて行って、ナスターシャを見つけ出し、手を取って教会につれていきました。そこで、ふたりは結婚式をあげました。

やがて、王さまや、お城の人たちや、お客たちが目を覚ましました。王さまは、イワンとナスターシャのために、すばらしいお祝いの会をもよおしましたとさ。

村上郁再話

資料『ロシア民話集下』中村喜和編訳／岩波書店